

文化は政治を変えるかーDIYからクリエイティブへ、 そしてアウトサイダーの台頭



アジア・アフリカ地域研究研究科3年
金 悠進
インドネシア
2016年10月26日～
2016年11月23日

渡航概要と内容

渡航者は、インドネシアにおける政治的アウトサイダーの台頭の背景を解明するため、本渡航を通じて、文化が政治を規定するという挑発的な仮説の検証を試みた。バンドンの人気市長リドワン・カミルは元々建築家であり大きな社会組織や政党・政治団体に属さない政治経験のない「アウトサイダー」であった。

渡航期間中は、主に午前中、日本文化センター（Nihon Bunka Center, NBC）でインドネシア語の語学学習に打ち込むことで調査対象者とのインタビューを円滑に行う準備を行った。午後は、

- ① 都市研究者・文化研究者・ジャーナリストとの議論
- ② 若者が集う文化イベントへの参与観察
- ③ バンドンの芸術家とのインタビュー

により研究内容を研磨した。具体的には、

- ① バンドン工科大学の研究者・フランス氏（都市社会学）との議論（11月16日）
- ② バンドンのインディペンデント音楽・ファッションフェスティバル・KICKFESTへの参加（11月4日）
- ③ バンドンの70年代のロック音楽シーンを代表する伝説的音楽家、ハリー・ルスリの息子ヤラ・ルスリとのインタビュー（11月18日）

などを実施した。

加えて、聞き取り調査を裏付けするため、一次資料の収集（バンドンの地誌・都市景観と文化空間の変容、大学の歴史に関する著作）にあたった。

渡航を通じて感じたこと

本渡航で認識したことは、リドワン・カミルという人物が、ジャカルタや他の都市部ではなくバンドンという都市であったからこそ台頭できたということを解明するには、まず第一に同市の地域的特質、とりわけ中長期的な社会文化の多角的な理解が不可欠であるということを感じた。

- ① 現地研究者との議論から、自身の主たる問い、すなわち「なぜバンドンでリドワンが台頭したのか、なぜ他の地域でなくバンドンで多くの芸術家やミュージシャンが輩出されてきたのか」という渡航者の疑問に対して、現地研究者にそれは極めて重要な問いであるとの指摘を受けた。なぜなら上記はバンドンの人々にとって当然の事実であるにもかかわらず、その要因は解明されていないからである。
- ② 加えて、フェスティバルへの参加と芸術家とのインタビューから、バンドンは音楽都市としての側面と軍事都市としての側面を対立することなく両立させていたということが分かった。
- ③ KICKFEST はメタルなどロックバンドが演奏し都市中間層の若者が集うフェスであるが、重要なことは開催地が軍事施設であったということである。同フェスは他の都市でも開催されているにもかかわらず、バンドンにおいてのみ会場が軍事施設であった。
- ④ ヤラ・ルスリの話によると、ハリーの父は軍人であり、皮肉にもハリーのスハルト体制に批判的な音楽活動は軍という強力な後ろ盾があったからこそ、逮捕されることなく音楽＝政治活動に専念することができた。

このように、バンドンは軍事都市、音楽都市など都市の〈顔〉の複数性を持っているように感じた。過言すれば、バンドンは軍事都市であったからこそ、ロック音楽など若者主体の都市文化が形成され、ひいてはそのような若者文化を背景とする人気市長リドワン・カミルが誕生する舞台を提供していた。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の調査によって得られた研究成果を、まず国内の学会で口頭発表し、次に国内の査読付きジャーナルに論文を投稿する。加えて、国際学会においても英語で口頭発表し、査読付きの国際ジャーナルに英語で投稿することを考えている。国際的な学術的貢献を通じて研究内容を磨き、2年後の博士論文執筆に本格的に取り組み、博士号取得後は国内外の大学・研究機関における常勤職に就くことを希望する。

主な奨学金の使途

*渡航費

*宿泊費

*食費

*生活費

*交通費

*研究・調査費等

*海外旅行保険 など